

論文 4

外国人から見た日本の多文化共生

羽衣国際大学
現代社会学部 放送・メディア映像学科 教授

にしやんた

はじめに

筆者は、来日 30 年になる。その間、生活の中で大きくかわりのあった 2 つの領域がある。「国際交流」と「人権」である。印象的なのは、両者の違いである。「国際交流」の場は華やかで、「人権」となると言葉を選ばずに言えば暗いとのイメージを抱いた記憶がある。さらに言葉を選ばずに言えば現在もその印象は変わらない。

来日の時期は、バブル時代ということもあって全国あちこちで国際と名の付く催しものが多く開催されていた。多いときに数件国際交流の梯子した記憶まである。まぎれもない楽しい思い出である。住んでいた京都府からは初代となる名誉友好大使という肩書きをもらい、地域の国際化推進に努めた。自分にとっては予想外の貴重な経験をしたのも同じ時期であった。そのような空間であることを後から知ったのだが、京都市内で最も国際化している地域をたまたま通りがかったときであった。そこには戦後間もない時期から来日し、劣悪な環境に住む外国人と子供返りして日本語を喋れない外国出身の老人の姿がそこにあった。来日以来繰り返し参加した楽しい国際交流会では出会ったことのない人たちがそこにいた。日本の国際交流は、基本的に留学生などの帰国する前提の短期滞在者を誘って繰り返し広げられ、住民としての外国人は国際交流の蚊帳の外にいた。住民としての外国人と関係あるのは「人権」の場なのだと気づかされた。

上記の経験が私にとって「国際」と「人権」のかけ離れた状況を踏まえ、両者を結びつけるための努力、そのことに気づいたものとしての自分などの使命であると感じるようになった。簡単に言えば、「国際交流」には外国人と日本人との共生として中身、「人権」には華やかさが必要と考え、私の場合は、講演活動の中などで上記の気づきを心がけてきた。「人権」と「国際」のかけ離れに対する長年の歯がゆい思いが解消されるかもしれないと思えたのは、1995 年の阪神淡路大震災発生あたりを境に社会に顔を覗かせた「多文化共生」のキーワードである。少なくとも個人として「多文化共生」との出会い以降、今に至り、そして平和で持続可能で発展可能な未来日本に向けてこの概念に寄せる期待は高く、ゆるぎない。

そもそもの私の来日は、日本の経済や経営について学ぶためであった。学士はもちろん二つの修士号に博士号も経済や経営についてだった。しかし、強みを生かした社会貢献という意味において私の関心はいつの間にか「多文化共生」に移行していった。「多文化共生」に関しての教師として、そして反面教師として母国スリランカの経験も日本への社会貢献という意味において強みに、後ろ盾になっていると考えている。

1. 文化とは何か

筆者にとって、日本でいつの間にかライフワークになっているのは、「多文化共生」をテーマにした講演活動である。講演冒頭、本題に入る前にいつも会場のお客さんに講演最中は、聞いているという合図として所どころ頷いてほしいとお願いをする。頷きは日本語を使う際の大事な役目を果たしていて、逆にいうと頷きのない日本語は考えられない。そのようなことに気づいたのは今から30年前で、日本に上陸して直ぐのことである。迎えが来るまで空港で待っている間、周りの日本人の会話している姿をみて聞き手が良く頷いていることに気づく。その頷きもワンパターンでは決してなく、実に多様性に飛んでいる。軽く頭を縦に振る場合もあれば、角度を深くする場合も、あるいは後ろ振り返りながら頷くパターンもある。最も驚いたのは、当時の空港の一角に並べられていた公衆電話に向かって頷いている日本人の姿であった。日本人は電話に対しても礼儀正しいのだというのが来日初日の私の日本に対する勝手な印象であった。

日本人化することを指す「豊化」という言葉があるが、長い年月の中で私などもすっかり豊化した。昨年、母国スリランカに帰国し友人と談笑しているとき、喋っているのは母語のシンハラ語だが、会話の中の日本で身についた頷きが無意識に登場していて、友人に「そんなに頭を振ったら、首が取れるぞ」と笑われたことを思い出す。とはいうもののスリランカもかなり独特である。例えば「はい」「わかりました」言葉を発する際、日本だと頭を縦に動かす、つまり頷くが、スリランカ人はその言葉を発する際は頭を無限(∞)字の形に動かす。さらに言えば、ブルガリアでは、yes と no の場合の頭の動かし方が日本とは逆になる。つまり yes のときは横に、no のときは縦に頭を振るのである。

国によって文化が異なる。しかし国が違わないと文化が異なる訳ではない。例えば日本なら、大きく男性か女性かで文化が変わり、日本人皆が同じだと思っても年齢によっても文化が変われば、地域的な文化の違いもある。無数に分類することが出来るが、最も細かく見ていくと、私たちは皆、指紋もそうだが顔が違うというだけの違いがあり、唯一無二の存在である。顔が違うだけ文化も違うということになる。対人関係にのみ違いがあるわけではない。周囲の環境も一瞬一瞬変わっていて、同じ景色は二度と現れることはない。つまり私たちの周りには「ちがい」しか存在せず、各々が「ちがい(違い、異文化、他文化、変化、多文化)」(以下、「ちがい」と省略して表現する)しかない中で生き、生かされているというごく当然の状況に気づく必要がある。

2. 文化とは“ちがい”である

講演会で次のような簡単な実験を行うことがある。「ちがい」と聞いてどう思うかについてである。良いことを連想するか、悪いことを連想するかについて聴衆に聞くようにしている。基本的にほとんどが悪いことを連想するのだと手を挙げて答える。もちろんときと場合によって異なることもあるだろうが、無関心、嫌い、怖いなど、自己防衛本能や現状維持バイアスなど理由がさまざまであろうが否定的な反応となっている。

上記のように、私たちの周りに「ちがい」しかないにも関わらず、それでいて私たちの生き方が、ちがいに対して否定的となっているということになる。これではちがいしかない中で生きるにあたって正しい生き方、理想的な生き方は何かという問いが出る。結論から言うとこれは正し

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

くない。それでは何が理想的かというそれは「ちがいが」しかないことを知り、知ったからには、出来るだけ貪欲にそれらを受け入れることである。受け入れては、「新しい自分、組織や地域などそれぞれの空間をその都度アップデートすること」である。

多文化共生はどうあるべきか、以上が全てということになる。上記内容を伝え「『ちがいが』との正しいかかわり方について解りましたか」と講演会の聴衆などに聞くと、皆が「解った」と答える。誰もがこのことを理解し、自ら実現出来る気であるが現状はそうはなっていないのが実情である。結論、理想的な組み合わせはむしろ稀である。実際にはちがいとどう関わっているのかのバリエーションは無数にありえるが、大きく4つに分類することが出来る¹。それは、「ちがいが」を受け入れるか否か、それらによってアップデート・変化するか否かとの組み合わせの中で考察することが出来る。具体的にそれらの4つの組み合わせは、(A)「互いに受け入れず、変わらず」、(B)「手前が受け入れず、相手を変える」、(C)「受け入れるが、変わらず」と(D)「互いに受け入れて、変わる」である。

¹ 谷口真美(2008年)、田村太郎(2009年)などを参照(参考文献参照)。

3. 多文化“共生”の多様性について

共生の形としてまず一つありえるのは、「ちがいが」を「互いに受け入れず、変わらない」(A)の組み合わせだが、ここに来る言葉は、拒否、抵抗、排除、排斥、差別、無視、シカトということになる。この組み合わせはどこまで進むかということ、相手側の「ちがいが」を手前としてどうしても受け入れないものとなると、相手との関係を断とうとし、相手の存在を目の前から消そうとする。消し方はいくつかあるが、それこそ相手を殺めるのはこの組み合わせで生ずるのである。恋愛の縄れや喧嘩などなどが原因で世の中に起きている殺人はこの組み合わせで起きている。例えば泣き止まないと親が子を殺し、認知症の介護に疲れ子が親を殺すのもこの組み合わせである。相模原障がい者殺人事件が生じた背景も同じで、障がい者を有りのままに受け入れられない加害者によって引き起こされたのである。ナチスによるユダヤ人虐殺もこの組み合わせで生じており、すべて争いながら生きることはこの組み合わせということになる。日本でも珍しくなくなった排斥運動もこの組み合わせにある。この組み合わせは、平和、持続可能性、発展性など理想からは最も程遠い組み合わせということになる。だが実際の世の中に存在しているということに気づく必要がある。

次の組み合わせは、「ちがいが」との関係において「手前として受け入れず、相手を変える」(B)の組み合わせである。つまり手前が受け入れていないとなると手前側は変わりようがなく、相手側が変えられ、変わるということになる。つまり相手を自分に同調させる、従属させる、従わせる、自分の色に染める、同化させるやアカルチュレーションという状況である。個人的な思い出などもある。私は、長年、日本で「外国人」として生きていて、最近ではそのようなことはないが、話は、来日間もない時代にさかのぼる。私は、当時温泉街として有名な雄琴の旅館で、布団引き、布団上げやお風呂掃除をしながら日本語学校に通っていた。周りの日本人が私に対して良く使っていた日本語を思い出す。「郷に入れば郷に従え」である。若干大げさに言えば、会った日本人全員から言われたように記憶している。中には何回言うのだろうかというぐらい繰り返す者もいた。正直とても個人的には好きになれるような言葉ではない。はっきり言って嫌いな言葉である。

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

むろん「郷に入れば郷に従え」は日本に来ている外国人全員が一通り言われている言葉であるに違いない。しかし最近になって当時のことを振り返ると別の評価が出てくる。結論、実は有難かったのである。「郷に入れば郷に従え」の言葉のおかげで大きく育てられていることに気づく。来日当時の十代の自分と比べ、大きく育ててもらっている。有難いことである。しかし、実際には来日している外国人のみが成長しているのではないか。もちろん日本のことなどを新たに来日した外国人に教えるあげる必要があるが、そこでとどめるようでは不十分ということになる。見方によっては相手を育てるボランティアをしていることである。一方的に教えるだけとなると相手は得しても、手前としては何らメリットがない。ボランティアをするのではなく、意地でもこちらも得したい。手前も、せっかく遠い国違う文化圏から来ているのだから一つでも相手から教えてもらい取り入れ自分の成長に繋げることが理想的である。むろん、行き過ぎた同化は言わずして暴力であり、外国人対日本人に限らず、あらゆる文化間の共生の形として実際に存在している組み合わせであるということに気づく必要がある。

三つ目の組み合わせは、「ちがいを「受け入れるが、変わらず」の(C)の組み合わせということになる。ここにくるのは、区別、分離、隔離、棲み分けなどである。知っている、つまり知識はあるが行動が伴わないような状況もここにくる。ここで個人的な経験を紹介したい。私は日本に来た30年前から気になっていた場所の一つに浜松市がある。知っている人も多いに違いないが、浜松と言えば日系ブラジル人が多く住んでいる街の一つということになる。30年前の日本はまさにバブル真ただ中であつた。日本の経済的なゆとりの表れか、当時はひんぱんにパーティーが開催され、中でも「国際交流会」のかんむりの付いたものが多かった。記憶が正しければ日に2、3か箇所国際交流会を梯子したと覚えている。外国人がほとんど住んでいなかった当時の私が住んでいた地域ですらそれほど「国際交流」が盛り上がっていたのだから、私の勝手な想像の中では浜松は想像を絶するほど交流が盛り上がっているに違いない。ブラジル出身者も多いのできつとりオのカーニバルのような毎日が続いているに違いないと思い描いていた。実際に私が浜松を訪れることが出来たのは来日してから27、8年経ってからであつたが、驚いたのはそこには私が想像したとはまったく別の景色があつたことだつた。そこにはきれいな棲み分けがあつた。同じ団地に住んでいてもブラジル住民と日本の住民の間には基本的にはコミュニケーションが希薄で、目には見えないが垣根があつた。長年の夢を見たこともあり浜松には一週間ほど滞在したが、その間、ホテル近くのブラジル・レストランで三食をとつた。一週間となると21食を食べ続けたことになる。ブラジルの食事も面白くて、安くてヘルシーでもあり、お酒も美味しく音楽も楽しいものであつた。時期がちょうどワールドカップブラジル大会開催中ということもあり、レストランがおそらくいつもより賑わつていた。友人などもたくさん出来、楽しい思い出となつた。しかし後になって振り返って気づいたことの一つは店内で会った客は全員日系ブラジル人であつたということだつた。店先には大きな字で書いて掲げた張り紙に店の中に大型スクリーンで試合を観戦し応援しようと日本語とポルトガル語で呼びかけてあつたことを思い出す。つまり何が起きているかということ、浜松は日系ブラジル人を街として受け入れたが、ブラジル人と日本人が互いを受け入れ上手く混ざり住んでいるのではなく、そこには棲み分けがあるということである。ここでは街の名前を挙げていたが、他の街でも同じ景色がありえると考えられる。逆に言うと、希望的観測も含め浜松は現在では変わっている可能性もありえる。例えば他の場面でも

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

棲み分けがありえる。ここ最近、男女共同参画社会という言葉の元に、それまでの男性のみだった職場などにおいても女性が登用される場合はあるが、確かに女性の割合が増えたということが確認できる。ただ女性の数や割合が増える以外で何もその空間において生じなければそれはただの棲み分けということになる。例えば、女性を雇うことにより、それまでの男性中心の会社が持ち合わせていなかったような女性ならではの知恵や蓄積が企業に取り入れられ組織が進化して初めて良いのであり、繰り返しになるが、ただ雇っただけで満足するとなるとそれはただの棲み分けに過ぎない。同じように、例えば世界で起きている出来事などについて学び知識はあるが、知識に過ぎず、知識によって行動なりに変化・進化などの現象が伴わなければただの棲み分けということになる。

4. 共生の現実

ここで私たちが自ら気づかなければならない重要なことが一つある。私たちの周りに生じている「問題」たるものについてである。大きな問題では、戦争やテロなどがあり、人権侵害、暴力、殺害、ドメスティックバイオレンス、ネグレクト、いじめ、それこそ、環境問題や経営不調なども問題の内に入る。政治的・社会的課題としての貧困、格差、少子化や財政難などもある。実は大きいものから小さい問題まで、間近なものから遠い世界の問題までが、なぜ生じているかと考えるとそれは、上記で説明した「ちがい」とのかかわり方・関係性が関係している。実は上記で説明した(A)、(B)、(C)の組み合わせのいずれかの因果応報として生じている。つまり周りの「ちがい」を排除、排斥、無視、シカト、相手を変える、相手に強要、同化、行動せずに知識だけにとどめ、棲み分けするなどが禍根となり生じているのである。さらにはその問題に気づこうと気づくまいと、その後も正しく対処することなく、(A)、(B)、(C)のいずれかの空間に放置しているがために問題はその後問題として世の中で存在しているのである。逆に言うと、私たち各々が責任をもって意識的に「ちがい」との関係性において(A)、(B)、(C)にならないように気を付ける必要があり、仮に意識しようとしまいと結果として(A)、(B)、(C)のいずれかになっているのであれば、私たちが関わっているその空間に早かれ遅かれ必ずしっぺ返しが訪れるということはある意味、断言できる。

5. 多文化共生と移民“問題”の因果について

2018年の年末の臨時国会において労働者受け入れ、実質移民受け入れが始まった。国会においての国民のコンセンサスを十分に得ないままの、少数意見に耳を傾けない多数派本位の強行突破の姿もまぎれもなく「ちがい」との共生の悪い例である。

入管法改正の国会審議の最中メディアなどを通して各国の移民受け入れ関連問題ニュースを見聞きすることが増えた。しかし間違っていないのは、それらの問題は、移民受け入れ事態によって生じているのではなく、つまり移民自体、移民受け入れ事態が悪いのではなく、移民受け入れの形・関係性や受け入れた後のその国・地域における受け入れ・関係性の形によって決まるということである。政策で言うと統合政策があるか否かその質にかかわるということになる。

例えばフランスの場合の移民受け入れの形・関係性は同化政策である。宗教や心情を持ち込むことを望まずまさに「郷に入れば郷に従え」ということになる。具体的にはブルカ禁止などがその代表として引き合いに出されることある。イギリスはどちらかという棲み分けであった。大きく言って住む場所や職種による棲み分けである。そして双方の国における移民に対する就職差別も報道されている。それはこれらの国における移民の受け入れた形・関係性ということになる。そうなると問題は必ずと言って良いほど起こる。同じフランスまたはイギリスの国籍をもち、フランス又はイギリスの教育を受け、生活している人間であるが、移民の子孫であるという社会的差別などが禍根となり因果応報としてその社会を破壊する分子となる。ホームグロウンテロである。品格のある移民の受け入れの形・関係性を形成するにあたって法整備を行うなど国家に責任もあるが、民際関係性の形が最も関係しているという点において社会形成の全員の責任であるということになる。テロは、言いかえれば品格のなき個人や集団による悪しき関係性が禍根となり社会形成員の連帯責任によって、もたらされているということになる。

トランプ政権において治安悪化を理由に移民受け入れ制限を設けようとしている。確かに受け入れからすべてが始まる点、ある意味で正しい判断なのかもしれない。しかしほとんどの移民は悪事を働く目的ではなく、幸せを求めて入国するのである。その点、上記のような社会における悪しき関係性が社会悪を生むと考えた場合、移民受け入れによって治安悪化が生じる可能性があるとするならば、それはその国家・国民の受け入れの質が悪いということを示しているということでもある。

6. 日本での移民“問題”、起こりえるかについて

日本でも移民受け入れた結果としての問題が起こりえるかと聞かれたら「大いにありえる」と答えている。上記のような世界の状況に照らし合わせれば答えが自ずと見えてくる。筆者も当事者の一人だが、日本にはすでに多くの移民はいる。今まで移民が日本でどのように受け入れ、どのような関係性に置かれているかを考察する必要がある。戦前からの渡日者や子孫いわゆるオールドカマーの中で、就職差別、結婚差別などの社会的差別については広く社会で知られている通りである。正当化するわけではないが、事実、差別が禍根となり、日本社会に対して世代を超えて恨みを覚えている者もいれば、反社会活動にやむを得ず流れ込んだ者中にもいる。時代が変わり、バブル経済時代に人手が足らなくなった日本に迎え入れられた南米からの日系人も日本社会で苦勞をして今に至っている。法案成立に至っても、外国人集住地域におけるヘイトスピーチなどもニュースは今も止む気配はない。移民受け入れ先進国からは、教師として、反面教師として学ぶことが多くある。

例えば日本でも元からの住民と移民の間での交流がなく、思い込みが膨張した結果としてヘイトスピーチ、悪しき噂などの対策としてのバルセロナ市などの「反噂キャンペーン」などが沖縄に対する反噂キャンペーンなどとして議論されており、日本人と移民との未来に向けた良質な関係構築にとっても取り入れられる日が訪れるかもしれない。しかし、少なくともニューカマーなどとの共生において一般的に生じている問題をみると、ゴミの分別や騒音などが中心であり、諸外国で生じている移民問題とは比較にならない。その点、持続可能性を望み、人間中心主義を重んじ、過去の反省に立ち、真摯に丁寧に取り組めば日本は移民受け入れを成功させる可能性のあ

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

る国でもあると言える。繰り返しになるが、平和で、持続可能で、発展可能な多文化共生実現について教師としても反面教師としても学べる事例は世界中にある。

7. 共生と共笑

異文化理解という歴史のある学問領域はある。しないよりはましだが、しかし異文化(「ちがひ」)だけを理解するのでは不十分であると筆者は考える。つまり理解はしたが、その後、(A)、(B)、(C)などの組み合わせで置かれるようでは十分ではない。むしろそれが問題である。

「ちがひ」しかない多文化な空間において平和、持続可能性と発展性が保証される組み合わせは、互いに「ちがひ」を「受け入れて、アップデートする、変わる」の(D)姿勢、行動があつてこそ成立する。冗談まじりに講演会などで紹介している例えだが、スリランカで「はい、解りました」のときに頭を無限(∞)の形に振るのだと伝えているのだが、それを知ったからにはその日の帰宅後に家族のメンバーに対して、あくる日は、会社や学校の関係者に対して実際に使ってみる、試してみることが理想的であると言っている。

「ちがひ」を「自文化」化する過程を「OBI」という言葉を使って三段階に分けて説明できる²。OBIとは英語単語の頭文字であり、Oとはobserve(観察)、Bとはborrow(借りる)、Iとはintegration(統合)の意味である。まずは五感を通して他文化に触れ・観察し、次にその「ちがひ(他文化)」を借り、つまり試したり、真似したりし、最後に統合し、自文化となる。「ちがひ」を互いに受け入れることが理想的であることは上述の通りだが、その状況を表す言葉として適切なものは何か、講演会などで聴衆に聞くようにしている。寛容、受容、協調、統合などの前向きな言葉が多いが、中には「妥協」と答える者もいる。他文化を受け入れるとはある一種の妥協かもしれない。その点、心の持ち様も大きな要因となる。上記の答え全てが正解だろうが、私は全てを無視して「共笑(ともえ)」という言葉が正解であると紹介している。

例えば答えとして「共生」と答える者もいる。「共生」は個人としても好きではあるが、この言葉を疑っている。共生とはよく使われている言葉であり、宗教界にはもちろん、教育分野、社是、地域社会などのキーワードとして見かける言葉として決して珍しくない。では日本における共生は違った者同士が互いに互いを受け入れているかという大きな疑問が残る。現状の共生形態は大いにして、同化、棲み分け、下手すれば排除、排斥、差別、抵抗、拒否、無視、シカトなども共生の形として社会に存在している。多数派本位、数の論理や力の力学の中で放置された状態での「ちがひ」の品格のある共生(ともいき)は困難である。その点、単なる共生や統合では不十分で、もっと細かく見ていくことで共生の質を高めるよう試みる必要が求められる。つまり単なる共生ならぬ、共楽、共学、共育、共活そして共笑が求められる。中でもブラック企業、非正規雇用、ヘイトスピーチ、ヘイトクライムなど片方のみが笑っている風潮が強まっている社会情勢にあつて「共笑」をこそ執拗に追及する必要がある。

² ジェフ・バーグラント(2011年)などを参照(参考文献参照)。

8. 矢は三本を束ねる、からの学び

毛利元就は有名人であるが、彼とセットになって有名なのは三本の話である。毛利元就が、毛利、吉川と小早川の三人の息子を前にして一本の矢では折れるが、三本に束ねれば折れないと実践して見せて三者の団結を呼びかけたという逸話に基づいている。テレビのコンテンツもネタが尽きたかわからないが、先日はテレビ番組で毛利の逸話が真実か否かの実験が行われた。実験の結果、毛利が言う通り一本は折れたが、驚いたのは三本とも折れたことだった。私もそうであったと同じように長年信じていた話が嘘であったと結果を聞いてほとんどの読者もショックを受けるに違いない。

しかし、この話を嘘と切り捨てるようでは気持ちが収まらず、なにより歴史は報われない。ここに時代に応じた新しいメッセージを見出したい。折れた原因を踏まえ、折れなくすることができるのが2つある。一つは3本だから折れたのであり、もう一つは3本の間に若干ながら隙間があったことが原因である。前者が原因だと考えると矢の本数を10本20本すれば折れないということになる。

これらの一本、一本となる力を一つの文化（叡智）として置き換えて解釈することもできる。つまりこの時代においては、私たちが持ち合わせていないちがいや文化をどれ程貪欲に束ねて行くかが求められている。一本、一本が増える都度、当事者またはその空間が強く、折れにくくなるということになる。実はそれだけではない。一本が増える都度、その者または空間が強く折れにくく強くなるだけでなく、優しく、しなやかに、美しく、豊かにもなる。いいこと尽くめということになる。毛利元就のことづけを見聞きし、3本という本数に過剰に捕らわれてはならず、学ぶべきは本数を束ね強化するという物事の方向性である。

もう一つ、若干隙間があったことも折れた一因ではないかということについてであるが、それ相応の意味を重ねることはできる。つまり、決まった空間に多様性はあったとしてもそれらの間に隙間があっては力にはならず、ないも同然であるということになる。

上記の内容を整理すると、今後、社会を形成するあらゆる個人や組織などを含むあらゆる空間において求められることが2つあり、一つはどれほど多くのちがい（多様性と変化）をちがいのままに束ねていくか、および「多文化“共生”の多様性について」に述べた(A)、(B)、(C)の組み合わせにならないようにコミュニケーションをとり良質な関係性を育むか、ということとであると言える。

9. 三方良しとしての多文化共生

日本には、人権啓発の活動に取り組んできた長い歴史がある。人権講演として多文化共生の話が求められることが多い。筆者としてもこれらの催し物に話者として出かけることあるが、主催者からは「人権講演会」の聴衆者を集めることに困っていると聞く。長年の尊い活動が何故報われないのかと考えるとそれなりにその理由も見えてくる。

日常において特にビジネスなどで登場する言葉の一つに、「ウィン・ウィン」がある。良い言葉ではあるが、上には上があると思えたのは日本の近江商人が大事にしているという「三方良し」と出会ったときである。商いを持続可能なものにするにあたって大切にしている法則であるという。三方とは、手前良し、相手良し、周り良しの三方であるが、実は人権や多文化共生にも三方良の考え方が今まさに求められている。

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

現場における人権啓発の取り組みは基本的人権尊重の必要性が出発点になっている。この立場での活動は大事で、今後とも続ける必要がある。しかし、何故、集客に苦労しているかというそれは、おそらく特に聴衆者の側が三方良しに至っていないからだと考えられる。つまり、講演会場に集まる者は、話者、つまり障がい者なり、女性なり、外国人なりのために集まるのであった。自分にとってのメリットがあるという発想はそこにはないのではないか。

1945年に人権宣言され70周年を迎えた今、人権の再定義が求められているのではないか。つまり、新しい時代の人権とは他者のためのものではなく、自分のためでもあり、周り全体においても良い、という発想である。特に自分のためになるということ、つまり新時代の人権とは自文化にはない他文化を知り、取り入れることによって、手前側（個人、組織や地域社会など）が強く、優しく、しなやかに、美しくなるための自分の権利ということになる。

10. 多数派ボケとは何か

物差しは何であるかによって誰しもが少数者にも多数派にもなりえる。世は多様性に満ち、多数のバロメーターが存在している以上、少数者に一度もならず、多数派であり続けることはありえないという前提がある。例えば筆者は母国スリランカを離れて日本に住むと決めた瞬間から日本において少なくとも民族的にもまたは肌色的にも少数者に分類されるようになった。社会において多数派に属しない少数派ならではの気づきも多くある。そんな中であって少数者は自身が属しない多数者社会で生きていくことに際して絶えず努力をする。これは一般に「ハンガリー」などという類の言葉で表現されていると考える。逆に人口の多数派に属する者は多数派の中で生きるにあたって必要な力は、自然と身についた文化などだけで間に合い、特別努力を求められることもない場合が多い。一種恵まれたその状況下であって少数者について知る必要はなく、努力して少数者の文化を吸収する様なことも基本的に認められないのは傾向として大いにある。

例として母国スリランカを取り上げたい。産み落とされ17歳まで住んでいたスリランカは、自他共に認める多文化・多宗教・多言語国家であり、宗教は街の景色としてだけではなく、人々の生活の中で賑やかに鮮やかに混在している。人口的に少数派のタミル人の多くが信仰しているヒンズー教、多数派のシンハラ人が信仰している仏教に至っては、日本でいう神仏習合そのものである。釈迦はヒンズー教の両親の元で生まれており、ヒンズー教では釈迦はヒンズー神の生まれ代わりと言われているだけあって両者は切り離しようがない。イスラム教も確実に信者を増やしており、キリスト教は、スリランカのエリートからヒンズーや仏教で差別を受けていた漁民などの下層民の獲得にも成功し、安定した支持基盤をもつ。

学校教育の中では宗教の授業時間が設けられ、時間になるとそれぞれの宗教に別れて学んでいる。イスラム教は、金曜日の午後、モスクに行く時間は、学生はもちろん会社員なら有給で保証されている。紛れもない多宗教国家である。多民族国家であるスリランカには民族ごとの集住地区もあるが、基本的に混在して住んでいる。

言語に関しては、シンハラ語、タミル語と英語の新聞はどこでも手に入る。テレビやラジオも言語ごとにチャンネルは存在する。今は数え切れないほどのチャンネルはあるが、私がまだ小さかった30年ほど前はテレビ局が1つしかなく、放送時間も夕方5時から夜10時位までと短かった。それでも時間をずらして同じ内容をタミル語とシンハラ語と英語で流していた。多言語が保証されていた。

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

学校でも言語ごとに教室が分かれていて、隣の教室では違う言語で教育が行われていた。毎週月曜日の1時限目は全校集会だった。そこで教員は、学生に向けて内容を3つの言語で説明してくれた。会議は3倍時間がかかったが学生はみんな先生が何を喋っているか良く理解できた。それが特別なことではなく、それが有難いなどと思わないほど、当たり前だった。私の母語はシンハラ語だが、小さいときから当たり前のように周りではいろんな言語が行き交っていた。違う母語同士が互いに居心地の良い言葉を使って対話していた。

しかし今になって気づいたことがある。それは人口の多数派であるシンハラ人は「多数派ボケ」しているということである。同類に囲まれている以上、多数派には日常を送る上で他の言語を覚える必要性もなく生活を送る上で全くと言って良いほど不自由はなかった。他言語を勉強する努力が少なかったことも自然な流れかもしれない。隣でタミル語が行き交った環境で17年生活したにもかかわらずタミル語が全くできない私も例外ではない。

50年近く生きて今になってやっと気が付いたことがある。一貫してタミル人友人が私に合わせてシンハラ語を使っていたということである。私に対して特別だったのではなく言語の面においてスリランカ社会全体においてタミル人がシンハラ人に言語を合わせてということになる。少数派のタミル人のなかには、シンハラ、英語とタミルの3言語とも流暢な人が多かったので、タミル人の友人は優秀だと考えていただけであった。しかし、彼らがこの地で生きて行く術として、多数派の言葉を覚えるしかなかった事実を見落としていた。

そんな中1983年に起きたちょっとした揉めごとが後に26年も続く、7万人が死に至りしめるような戦争になるとはそのときは誰も考えていなかった。極論すれば戦争の最大の要因は言語であり、言語をめぐるタミル対シンハラ戦の戦いであった。多言語国家と思っていたスリランカの実態は、言語の棲み分けであり、多数派による少数者に対する同化があった。

スリランカ内戦が終わり、念願だった生まれてから一度も行ったことがなかった少数派が多く住んでいて、戦争の中心地だったスリランカ北部の都市ジャフナに行けたのは戦後数年経った2014年であった。アジアンタイムズ(BS ジャパン)のレポーターとして、激しい戦争を生き残った多くのタミル人と話を聞き、なぜ同じスリランカ人同士が殺し合わないといけなかったのかを探った。結論、人災の原因はこの国の「多数派ボケ」であることを再確認した。

取材中に新たな動きも確認できた。上記でも若干触れたが、スリランカの教育現場においてこれまで棲み分けされていたタミル語とシンハラ語を民族同士が互いに授業科目として取り入れるようになっていた。言語をめぐる26年間にわたる戦争の痛ましい経験から大いに学び、スリランカは、争いのない平和な未来に向けて国としての礎を築こうとしている。

翻って日本はどうかということになると、この国は少数者に対して日本語での教育と同等の条件で母語での教育を受ける権利すら保障していないことに気づく。客観的にみると日本は自他共に認めなければいけない「多数派ボケ国家」であるということになる。日本国内にも実はすでにたくさんの違いがあり、多様性は今後も進むに違いない。隣に違いがあるのに、気づいてなかったり、排斥したり、棲み分けしたり、多数派に同化させたりしてはいないかと確認する必要がある。

違いはただ隣にあるだけでは意味がなく、各々が、特に多数派側にそれらを迎え入れる姿勢が求められる。多様性の活用が、日本の長期にわたる景気停滞の打開策の切り札として取り上げられている以上、日本の多数派が少数者について学び、理解する努力を怠らないことが一種の社会

的義務でもあると言える。これは私が将来的に骨を埋めて土となるこの日本に伝えたい、私が産み落とされた母国スリランカからの最大のこづけでもある。

11. 共生の段階の順番とその功罪

共生には、時系列で見れば段階がありえる。人間は防衛本能の一環でもある現状維持バイアスや正常性バイアスなども関係し、基本的に最初から異文化をすんなり受け入れるようにはなっていない。受け入れる過程で順番が見受けられる³。最初は(A)の段階は排斥、排除、無視、シカトなどがくる。(B)次に自分側に抱え込もう、つまり同化を試みる、(C)その次は、自文化に抱え込む限界を感じるによって棲み分けが生じる。そして最後に(D)統合があり、統合の形態が共笑である必要性などがでてくる。

それほど上手くはないが例え話を試みたい。例えば、地元のいつも通い慣れた食堂にある日を境に外国人が来るようになったとする。むろん例外もあるだろうが、店の常連客は、最初から外国人と仲間にはなるようなことは基本的に考え難い。おもむろに「出て行け」などとはもちろんににしても、最初は、違和感、心の距離を覚えることは避けようがない事実でもある。つまり最初は第一の段階である。そしてその後も何度か店で当の外国人を見かけるようになると、例えばこちらがビール飲んでいるときなど酔った勢いも借りて「お兄ちゃんビール飲むか」と誘うとする、つまりこちらの文化に抱え込もうとしている第二段階に移行したと言える。しかし例えば彼が厳格なイスラム教徒などだとして、酒は飲まない人だったとすると、自分らの懐に入れたつもりだったとしても、違うのだと気づき、第三段階となる線引きされた段階に入り、棲み分けが生ずるのである。そして次にこそ、「酒は飲まなかったらイスラム教徒・彼は何を楽しみなのか教えてよ」となれば最後の第四段階に至るということになる。

さらに、例えばこの原稿を書いている最終の2018年の臨時国会で外国人労働力を受け入れ拡大する入管法が国会で改正された。野党に限らず与党内や国民からも反発はある。これはおそらく(A)の段階ということになる。そして次は(B)になると、大まかに言って外国人労働者に向けて「郷に入れば郷に従え」の言葉に代表されるような社会の多数派による同化の動きになると思われる、そして早かれ遅かれ(C)次の段階では、外国出身者は丸々日本人と同じようにはなれないと気づくようになり区別、棲み分けが始まるに違いない。そして次にこそやっと(D)違いなども含め社会統合の段階が訪れるということになる。

しかし、私は最初から、ちがい(多様性・変化)との関係性に関して(D)の組み合わせが大切であると考え。それには2つの意味がある。一つは、「多文化“共生”の多様性について」で説明した(A)、(B)、(C)の段階で時間を費やす間は、望ましくない多文化共生が結果として引き起こすいろんな問題の禍根をつくる、つまり種まきをしていることになる。二点目は、上記に述べた多数派ボケにも通じるが、人間としての成長についてである。つまり生きることの醍醐味はおそらく多くの違いを知ることによって成長し、違いを謳歌することであると考え。多数派であればあるほど、少数者について知り、学び、力に変える必要性に迫られることはないとなると、せつかくの人生において客観的にみて勿体無いのではないかという見方もできる。繰り返しになるが、多文化共生の成功のカギは多数派が握っているということになる。

³ 谷口真美(2008年)などを参照(参考文献参照)。

12. ちがいの受け入れ、日本が不得意か

違いを受け入れて変わることの大切さを説明すると、反論を受けることは多々ある。ほとんどの場合、日本の地形や歴史に根拠として用いられる。「日本は島国である」や「鎖国していた」がよく使われる具体的な言葉である。以前、入学間もない18歳の教え子の大学生にも「鎖国していましたから無理」とあたかも江戸時代から生きてきたかの口調で言われたことを思い出す。では果たして日本はそのような国なのかを考えた場合、少なくとも私にはそうは考えられないことは多々ある。

日本の自宅の側にあつて頻繁にお参りをする弁財天を祀った神社がある。一方のスリランカの実家のすぐ側にヒンズー教のサラスワティー神を祀った寺院がある。それぞれの住まいの近くに偶然であるにしても寺院があることが有難いと思っている程度だったが、驚いたのは最近になって両者は同じ神であることを知ったときであった。実は日本の神として崇められ、親しまれている七福神に関しては、日本古来の神は恵比寿さん一神のみで、残り内の三神はインドに、残り三神は中国に由来する。上記の例一つとっても日本は違いを受け入れることが不得意とは言い難いことが理解できる。違いの受け入れに対する日本の実態はむしろ、豪快、強引、得意中の得意、お家芸、節操がないなどどの言葉がより適切かは別として、少なくとも日本は違いを受け入れることが不得意という固定観念を打破することが日本の多文化共生を考えるうえでまずもって大切になる。

「ちがい」との理想的な向き合い方について日本で昔から伝えられている文言なども確認できる。例えば徳川将軍家の兵法指南役であった柳生宗矩の家訓に次のような文言がある。「小才は縁に逢って縁に気づかず、中才は縁に逢って縁を活かさず、大才は袖触れ合う他生の縁もこれを活かす」。「ちがい」という言葉こそ使っていないものの、同意ではないか。上記のことから、他文化の受け入れは、他者のためではなく、手前側のためになるという見方と合わせて、多文化との共生は今まで日本にはなかったようなことで、新たに取り入れなければならない発想という解釈ではなく、「ちがい」の受け入れはむしろ日本人らしさであるとしてこれを機に思い出すということであるのではないかと考える。

13. 共笑を妨げる三つの壁

共笑は理想的である。人々は少なくとも建前上、その実現を望む。望もうとしながら実現出来ないのは、理由として共笑を妨げる壁があるためということになる。それらは大きく3つに分類できる。(1) 心理的要因、(2) 制度的要因および(3) 行動学的要因である。簡単な言葉で順番に紹介すると、心の壁、制度の壁と言言の壁ということになる。各々も壁となるが、3つの壁が互いに連携し合い、さらに大きな壁をつくっている。共笑を望もうとしても、許さず、壁となり跳ね返し、「多文化“共生”の多様性について」で説明した(A)、(B)や(C)状況・空間に追いやるのである。

(1) 心理的要因、つまり心の壁とは、簡単な言葉でいうと思い込み、偏見、決めつけ、過信、無関心である。この部分が3つある共笑を阻害する要因の中でも最大の壁になるといえる。

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

人間は思い込みの生き物である。相手は悪気がないことは理解している上で、個人的な経験を少し紹介すると、例えば私のような褐色の肌色をした人間は日本で一般的に夏は強いと思われている。「暑い」と口走ると冗談を言っていると思われる。嘘と思われるかもしれないが、サウナに入っている時も「熱くないだろう」と言われたこともある。さらには私のような肌色の者の口から「辛い」という言葉が出てくることも一致しないと言われる。

私自身は 39 歳で日本人と結婚したが、心の壁に基づいて 3 つの理由を挙げられ反対された経緯がある。具体的には①（スリランカの仏教文化では、墓守の習慣がないにも関わらず）仏教徒でかつ長男であるにも関わらず、スリランカの実家の墓を守っていないことが不真面目である。②（結婚以前の独身時代に日本国籍を取得していたため）母国を捨てた人間は妻や子をも捨てる可能性があるから信用できない。③（日本の社会でいじめの対象になるから）肌色が褐色の孫は困るとの内容である。

日本で 2016 年に結婚したカップルは 620,531 組で、その内の 21,180 組が国際結婚で、その割合が結婚全体の 3.4% である。最も多かった 2005 年の国際結婚の数は 41,481 組で、割合では 5.8% に登る。事実、日本において 1/30 組～1/17 組の割合が国際結婚であるにも関わらず国際結婚への理解は必ずしも進んでいるとは言える状況ではない。

近年のミス・ワールド大会の日本代表に関する状況も特筆である。2015 年のミス・ワールド世界大会の日本代表として黒人系アメリカ人の父と日本人の母をもつ宮本エリアナーが選ばれ、続けて翌年には、インド系父と日本人母をもつ吉川プリアンカが同じ大会の日本代表に選ばれた。インターネットなどを中心に「日本人の代表者ではない」というヘイトスピーチが行き交ったことは広く知られている通りである。2013 年時点ですでに、日本の人口動態における出生数は 104 万 2813 人で、その内の「少なくとも父母の一方が外国人」は 3 万 2529 人と、全出生数の 3.1% である。つまり日本で生まれている 30 人に 1 人がダブルまたは両親とも外国人元で生まれているにも関わらず、国際結婚同様に日本国内の理解が必ずしも進んでいるとは言えない状況である。このように多文化共生を妨げる要因としての心理的要因、つまり心の壁が存在していることを踏まえ、正しい心、共笑な心、多文化共生社会実現に対する高い志をもつべく、特に多数派に対する正しい知識の提供や啓発活動が求められると言える。

(2) 制度的要因、つまり制度の壁とは、法律、条例、既存の枠組み、システム、常識、当たり前ということになる。現状は必ずしも共笑な社会を受け止めた制度になっているとは限らない。例えば、教育を取り上げると、日本に住民登録のある小中学校の就学年齢にある外国籍の子どもの中の少なくとも約 2 割に当たる約 1 万 6000 人が、「就学不明」である⁴。文部科学省は「教育についてのすべての者の権利を認める」とする国際人権規約を踏まえ、「外国籍であっても本人が希望すれば就学できる」として受け入れを自治体に求めているものの、就学義務は憲法 26 条に基づき、「国民に対し子どもに小中学校の教育を受けさせる義務を課す」となっており、外国籍の保護者は「国民」ではないため、子どもに就学させる義務を除外されていることが大きな原因となっている。日本は日本語での教育を基本としており、制度的な学習支援の不十分さとその必要性が指摘できる。

外国人が日本で共生するにあたってさまざまな生活段階における制度設計、改善や制度の温故知新が求められている。外国人の受け入れが本格化した現在、入国政策に止まることなく、対して社会統合に関する政策についての同時進行で取り組んでいく必要が求められている。例えば、山

論文特集「人口減少時代の多文化共生」

脇啓造（明治大学教授）などの移民政策・多文化共生の専門家によって、2003年という早い段階で「多文化共生基本法」の提言がなされており、法案成立は急がれている。制度的要因に関して、時代や状況に応じて絶えず改善が求められ、その際の価値基準として共笑をバックボーンにもつ必要があると考える。

（3）行動学的要因、つまり言動の壁も共笑の状況を妨げる。人々の行動は結局のところ、心理的要因と制度的要因が大いに影響している、または規定していることは言うまでもない。どんな言行が多文化共生を妨げるかという、インターネット上の書き込みはもちろん、外国人集住地域におけるヘイトスピーチなどは紹介できる。

しかし日本には世界に類を見ない、他者との人間関係を大切にするコミュニケーション関連文化は多く存在している。例えば祝儀、不祝儀、お礼状、年賀状、お中元、お歳暮などはそうである。中でも感動した記憶として残っているのは祝儀に対する半返しである。合理性を考えれば最初から半分の額を祝儀として渡せば良いのではという素朴な疑問を抱く。しかし、一見面倒なことを行うことはそれほど日本社会が人間関係に対して丁寧であることを証明していることでもある。古来より続けてきた日本の人間関係文化を自ら守り続けると同時に、これら良質な文化に外国人を内包させることが言わずして理想的であると考えられる。

上記の内容を整理すると多文化が共笑な状況で共存するに際して、心理的要因、制度的要因と行動学的要因が関係していること、そして共笑とは結果ではなく、絶えずその理想を追求している過程であり、特に多数派が共笑の実現の鍵を握っているといえる。

⁴ 奥山はるな（2019年）などを参照（参考文献参照）。

おわりに

本稿において主に個人的な経験に基づいて日本の多文化共生についての未来に向けた提案を行なった。日本において本格的な多文化共生の追求はこれからだと考える。多文化共生は、社会形成の全員にとってのテーマである以上、すでに始まった未来に向けて多文化共生を成功させるのに際して、国内の歴史を振り返ることと、諸外国の経験からも学び前進することが求められる。

日本人の多くの中にまだ「日本人」対「外国人」という区分が存在している。近い将来その垣根がなくなり「同じ人間」として向き合い、互い手を携え住み良い地域、国を創って行くことを期待したい。さらには古今東西の最大関心事でもある多文化共生に関して日本が世界のロールモデルになることを願ってやまない。

参考文献

- ・ 谷口 真美「ダイバシティ・マネジメントー経営成果を上げるためにはー オピニオン」、早稲田オンライン、2008年4月7日。
- ・ 奥山はるな「にほんでいきる外国籍の子就学不明 1.6万人義務教育の対象外」、毎日新聞、2019年1月6日。
- ・ ジェフ・バーランド『受ける日本人、繋がる日本人』出版芸術社、2011年。
- ・ 田村太郎「人の多様性が持続可能な組織をつくる」『ダイワ』F S・青少年サステナビリティ・カレッジ講義録、大和証券グループ ジャパン・フォー・サステナビリティ、2009年。